

まえがき

空海とはどういう人物なのだろう。

これは、‘弘法大師’と呼ばれる偉人、万能の天才としての空海のことではない。

今、目の前にいたとしたらどういう風に見える人なのだろうと言う人間像であり、また、偉人、天才と呼ばれる以前の、生身の人間の生涯、つまり私たちと同じように悩み、苦しみ、足掻いて生きている、ひとりの人間として空海を捉えるという試みである。

空海が高野山を開創して千二百年の時を経た現在、密教関連の本、弘法大師空海関連の本は数多く世に出ている。

真言行者である私の場合、密教とは何か、もし可能ならば空海に直接、その教えについて伺いたいと思うが、それが無理なら、空海と言う人間を通じて、あるいは、その行動から密教という教えを感じてみたいと考えたが、これまで語られて来ている空海は、難解な密教という教えを体得し、それを伝えた聖人君子として、あるいは万能の天才として語られており、むしろ私にとっては、密教がより遠いものになるばかりであった。

そこで、空海はどうやって密教に辿り着いたのか。単なる偶然であったのか。それとも何か求めていて、その先に有ったのが密教だったのか。そして、その教えを使ってどうしたかったのかといった、密教に辿り着くまでの空海、そして密教とともに駆け上がっていった空海について、自分なりに考えてみることにした。

それに際して、空海の業績にばかり目を向けるのではなく、努めて、人との交流を通じた感情の機微から考えてみることによって、人間空海を感じられるよう試みた。

そうして見えて来たのは、決して超然とした、私達と全く違う人種ではなく、生涯を通じて怒り、悲しみ、人生に四苦八苦しなから前へ進もうとする素顔の空海だった。